

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

この報告書は、2017 年から3年間にわたり作文コンクール「わたしの夢、ぼくの夢」 を実施し、その成果をまとめたものです。。

目 次

はじ	じめに	• • • •	• • • • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • • •	• •	1
1.	作文コンク	ール	総括	• • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • • •	••	2
2.	作文コンク	ールカ	ゝら見 <i>え</i>	てき	た政策	提案	• • • • • •		5
3.	応募作品の	分析	• • •	• • • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • • •		7
4.	受賞作品集	į ···	• • • • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • •	• • • • • •	1	1
5.	作文コンク	ール閉	月催概 要	<u> </u>	• • • • •	• • • • • •	• • • • • •	4	1
6.	ひとり親家	定支援	受プロジ	ジェク	ト実行	委員会	• • • •	4	2

はじめに

ひとり親家庭の子どもたちを対象とする作文コンクール「わたしの夢、ぼくの夢」は、2017年に第1回を行い、2019年まで3回を重ねました。

私が日本の会長をつとめるユニセフは、ご存知のように、世界中の飢餓や紛争に苦しむ子ど もたちの応援をしています。

世界のほぼすべての国において、子どもはおとなより貧困に陥りやすく、貧困は子どもの身体だけでなく、精神や社会的発達に生涯にわたる影響を及ぼす可能性があります。

日本の子どもたちは、絶対的貧困の中に放り出されているわけではありませんが、7人に1人の子どもが相対的貧困を強いられています。それも、ひとり親家庭の子どもが多い。

それは、とりも直さず、女性の収入が低く、結婚出産により仕事をやめざるをえない雇用環境に大きな原因があります。

NPOあごらは、そうしたひとり親家庭の母親の就労支援を目的につくられました。そのあごらが主導し、経済格差や教育格差に悩むひとり親家庭を支援しようと活動してきた「母と子支援議員連盟」の国会議員の方々の協力を得て、この「作文コンクール」は実現しました。

子どもたちの作品のひとつひとつにこめられた思いが、今後の対策にしっかりと活かされる ことを願い、また多くの方々のご協力ご支援に感謝いたします。

この報告書は、過去3回にわたって行いました作文コンクールの入賞作品を紹介するとともに、応募のあった多くの作文から見えてきた課題と政策提案をまとめたものです。

2020年3月吉日

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会 委員長 赤松 良子 (元文部大臣、日本ユニセフ協会会長)

1. 作文コンクール 総括

2017年、2018年、2019年と、3年にわたって、ひとり親家庭の子どもを対象として「作文コンクール」を実施してきました。この3回の作文コンクールの総括を報告させていただき、各党各省庁で政策に反映していただくことを期待します。

【子どもの貧困】

■子どもの相対的貧困が言われて久しい。特に母子家庭の子どもは2人に1人が貧困だと言われている。その大きな原因は母親が働いているにもかかわらず、収入が低いことにある。

我が国では、長い間、女性は補助的労働力としてしか考えられておらず、景気の調整弁の役割とみなされてきた上、結婚・出産すると、家事育児を担うべきという性別役割分業意識が社会で根強いため、長期にわたる就業が不可能で、夫との離死別後、再就職をしても子どもを育てられるような収入を得る場が少ないからだ。

■離死別で母子家庭の母となった(未婚も含む)女性たちが安定した収入の得られる正規雇用になれるのが理想だが、社会は残念ながら、男性までも非正規雇用化が進んでいる。そこでまず、2つも3つも仕事を掛けもちし、夜中や早朝、休日までも働いている女性たちの負担を少しでも減らせないか、家にいて収入を増やせないかと在宅でのe-learningをつかった教育訓練と就労支援を積極的に実施できる「母子家庭の母の就業に関する特別措置法」が2003年に制定された。その際に特別法制定に動いたのが超党派の「母と子支援議員連盟」(丹羽雄哉会長、円より子事務局長)であり、「NPO法人あごら」であり、「福祉から就労へ」をキーワードとした、就労により自立のための新たな施策への転換点ともいわれた。もちろん、病気や障がいによって、働けない人もいる。福祉は必要である。しかし、まともに働いているのにいつ職を失うかもしれない不安定な雇用や子どもに高等教育も受けさせられない収入のあり方がいいわけがない。まずは、子どもの精神的安定のためにも、母子家庭の母への教育訓練と就労支援にやっと政治の関心が向かった。

そしてその後15年、全国各地で自治体が訓練や支援をし、一定程度の実績をあげてきた。国 も毎年「母子家庭の母の就業支援施策の実施状況」を国会に提出してきた。

【作文コンクールの実施】

■ひとり親家庭の母への就労支援こそが子どもたちへの大きな支援になるとの認識のもと、議連もNPOも15年近く取りくんできたが、実際にひとり親家庭の子どもたちが現状をどうとらえているか、そして、将来の夢をしっかり育んでいける状態にあるのだろうか、それを調べ、国の政策に活かしてもらう目的で、実施したのが「作文コンクール」である。

1回目の2017年は、小学生部門、中学生部門、高校生部門の3部門であったが、一昨年2018年はひとり親家庭の親の気持ちを知りたいということから、親部門、親子部門を設けた。そして、3回目の2019年は、ひとり親家庭で育った高校卒業後の18歳以上の「おとな」部門を設けたのは、離死別でひとり親家庭になった子どもの側の気持ちを知りたいという親や、なかなか親子同士で話し合いができないという人たちの声が多いことから、客観的に「ひとり親家庭」

の現状を聞ける機会を設けたのである。

全体の応募作は決して多くない。優秀作品には10万円という副賞をつけたので、応募が多いかと予想したが、まず、テレビ新聞等で周知されず、ネットと全国母子寡婦団体等のひとり親家庭関係団体を通しての募集となったため、多くの子どもたちに周知されなかったことが原因と思われる。

また、作文コンクールを実施するにあたって、活字文化がすたれつつある現在、作文を書くという行為に抵抗を感じる子も多いかもしれないという危惧があった。どんなに離婚した親への葛藤や貧困への恨みを抱えていたとしても、また親への感謝があったとしても、そうした思いを素直に作文にできない子どもの方が多いのではないかと思った。それでも、そんな杞憂を吹き飛ばすように、甲乙つけがたい感動を呼ぶ作文の応募があり、数の多さは問題ではないのが現状あろう。

全体を通して、応募作品はいずれもひとり親家庭の厳しい現状が垣間見られ、しかしそれにもかかわらず、子どもらしい夢を持ち、その夢を叶えるための努力をしている元気な姿にあるれていた。さらに人々や社会に役立ちたいというものが多く、親や周りの人々への感謝がにじみ出ているものであった。

どの作文も、ひとり親家庭の厳しい環境の中で、その苦難を他人のせいにしたり、政治のせいにすることなく、しっかりと乗り越えていく力を持っていた。

小学生の作品からは、その年齢なりに母親を楽にさせてあげたいとの思いが強くにじみでていた。中学生の作品からは、親への恩返しや自分の夢を叶えるために、努力していく姿勢が見られ、高校生からはひとり親家庭だけでなく、すべてのこどもたちの夢を叶えるにはどうするかという、政策提言が多くあった。

子どもたちの夢は実に多岐にわたっていた。

鉄道の運転士、日本ザリガニの研究者、司書教諭、スポーツ選手、絵本作家、医師、看護師、 歯科衛生士、音楽を通しての平和活動家、海外協力隊、スクールカウンセラー、デイサービス の先生、病院に行けない人・苦しい人を助ける人になりたい、などなど。そして、「お母さんに 美味しいものを食べさせてあげたい」「白い大きな家を建ててあげたい」「高校生になったら、 アルバイトをして家にお金を入れたい」など、母を想う気持ちにあふれたものが多くあった。

2年目の2018年に、親部門、親子部門を設けたのは、2017年の子どもたちの作文が甲乙つけがたいほどみな心をうつものであり、こういう子どもを育てているひとり親家庭の親の立場と気持ちを知る機会にしようとの企画であった。また幼い子どもの場合など、作文という枠組みでは、手段として難しいものではないかという声もあり、絵やはり絵など、作文以外のものでも親子で応募できるものとし、広い形で親子部門を設けた。ただ、主催者側の意図を十分伝えられなかったせいか、親子部門への応募は3作だった。しかしそのうちのひとつは優秀賞をとり審査委員長と委員5名全員が最高得点の5をつけるという良質なものであった。

親部門は、離婚によって子どもと共にくらすことができなくなった父親の立場からの応募がかなりあった。近年、母子家庭だけでなく、父子家庭にも福祉の手がのびるなど、さまざまな対策がとられているが、離婚によって子どもから引き離されてしまう立場の親の気持が作品ににひみでていて、受賞作はなかったが、子どもの福祉や権利を考える上で、考えさせられる問題を提起してもらえた。

2019 年(第3回)に設けた、ひとり親家庭で育った18歳以上の「おとな」部門では、離別死別の家庭ともに、苦労しながら育ててくれている親や支えてくれる周りの人たちへの感謝が

あふれていたが、別れて暮らす親への複雑な思いが交錯していて、「離婚と子ども」の問題は、 我が国ではまだまだおき去りにされていて共同養育や面会交流などが必要ではないかと思わせ られた。しかし、両親や離婚を客観的に見つめ、中には女性の老後にも思いをはせるなど、社 会への提言も多くあった。

全作品に、厚生大臣経験者の丹羽雄哉、坂口力両氏も目を通されたが、「涙無しでは読めないものもあり、厚生政策に長年尽力してきた身ではあるが、政治の貧困を痛感した」とコメントされている。

政治の役割とは、落ちこぼれる人たちを切り捨てないことである。作文を寄せてくれた子どもたちは自分で人生を切り開いていける子どもたちであり、決して落ちこぼれる子どもではない。しかし、彼らの背後に、夢など持てないと思っている子どもたち、たとえ作文コンクールの存在を知ったとしても、10万円の賞金をもらえたらいいなと思っても、作文など書けないとハナからあきらめてしまう子どもも大勢いるのだ。そうした子どもたちのためにも、寄せられた作文を各党各省庁の政策に活かして下さることを切に願う。

作文コンクールからは以下のような政策課題が見えてきた。

- 1. 母親の雇用安定と男女の賃金格差の是正
- 2. 別れた父親からの養育費確保
- 3. 共同養育・面会交流の促進支援
- 4. 学習(塾などの費用支援)
- 5. 病児保育・母親病気児の支援
- 6. 近隣・学校等の見守り支援
- 7. 職場・保育所に近い公営住宅などの借り上げや保証人・家賃保証制度
- 8. 社会のジェンダーバイアス、離婚への偏見の是正

2020年3月吉日 実行委員 円より子 (元参議院議員)

2. 作文コンクールから見えてきた政策提案

3 年間で寄せられた多くの作文から見えてきた次の5項目をとりあげ、我が国のこれからの 政策課題として提案したいと思います。

- 1. 社会の壁を乗り越える(地域社会のジェンダーバイアスや偏見の是正)
- 2. 貧困の再生の防止 (こどもの夢を守る社会)
- 3. 子どもの心のケア (離死別を乗り越えるための子どもへの支援)
- 4. 副収入による生活の安定(ダブルワークの推進)
- 5. 支え合える生活(グループホームの設置促進)

1 地域社会のジェンダーバイアスや偏見の是正(社会の壁)

子どもの貧困、特に貧困率の高い母子家庭がクローズアップされていますが、これは、就労問題や子育て中であることなどが大きく影響しており、個人に努力を求めても解決できない、社会的な問題を内包しています。こうした社会環境を乗り越えるためには、個人の努力を後押しする地域社会づくりが求められ、「血縁」による支援が得にくい現代社会に於いては、「地縁」による子育て生活のサポーターとして「社会的家族」(シニア世代などを担い手とする)づくりを進めていくことが、ひとり親世帯はもとより、全ての子育て家庭への支援に繋がる支援策となることが期待できます。

2. 貧困の再生の防止(子どもの夢を守る社会)

母子家庭は、子どもの進学のために家計をやりくりし、学費貯蓄に努めています。 学費の 高騰は、家計を圧迫し、特に、低所得の母子家庭にとって、子どもの将来の夢に繋がる進学は、 親の願いであり、学費と生活費の確保は、深刻な問題となっています。こうした環境でも、母 子家庭の子どもは、「努力すれば、夢が叶う社会」であることを願っています。貧困の再生を 防止する直接的な支援策として、学力に関わらず入学、卒業を条件とする給付型の奨学金と都 道府県の福祉貸付金(生活費)を併せて貸付け、在学期間中の生活費を給付型特別貸付金とす ることや、学生寮の現物給付(公営住宅を無償で提供)など、卒業(資格取得)を支援し、自 立への道をより確実なものとしていくことが求められます。

3. 子どもの心のケア(離死別を乗り越えるための子どもへの支援)

親との離死別は、子どもにも大きな影響を与えており、時には葛藤を生んでいます。親は、 生活を守ることで一杯で、子どもには呵責の念を持ちながらも、心のケアまでは余裕がありません。また、離婚は決して円満な解決を導いておらず、子どもへの影響は、仕方ないことと考えられていますが、子どもは、一緒に暮らす親への思いや遠慮から、会えない親を思う気持ちを抱えながらも、誰にも打ち明けられす、親との離別という「トラウマ」が一生残ってしまいます。共同親権や養育費、面会交流など、子どもの権利を護るとともに、子ども自身が親との離死別を乗り越えるために、子どもの心に「寄り添う」支援が求められます。

4. 副収入による生活の安定(ダブルワークの推進)

母子家庭の働き方を見ると、主たるパートに副業を持ち、二重就労、三重就労で生活の維持に努めていますが、安定した就労が見つからない中、副収入を得るためには、子どもとの生活を犠牲にすることになり、無理な働き方をして体を壊すこともあります。主たる就労に加えて、副収入を得ることで生活を維持する働き方について相談支援体制を設け、適切な仕事を組み合わせて子どもとの生活の維持と、学費が少しでも貯蓄できるのであれば、豊かとはいえないまでも、ひとり親家庭の支えになっていきます。また、常勤雇用が難しくなり、働き方改革が進む社会環境に於いて、副業としてITCを活用した在宅ワークを受託して、副収入が得られる環境が整えられていくことで、母子家庭は、親子の時間が確保でき、安定した生活が築いていける社会的な取り組みが求められます。

5. 支え合える生活(グループホームの設置促進)

生活の厳しさを互いに支え合う環境は、自立心を高めます。支え合う生活を築く住宅政策の一つとして、家賃補助の役割を果たす公営住宅の優先入所を活用して、支援者が管理人となり、1棟全体を優先入居の対象としたグループホーム的な取り扱いが普及すれば、支え合う環境は、子育て中の母子の生活に余裕を生み、共助の仕組みづくりが生活を支えていきます。また、子どもが独立し、生活の厳しさから年金の掛け金も払えなかった寡婦は、独居となって、将来の不安を感じて生活することになりますが、こうした場合にも支え合う関係が、生活の支えになっていきます。これらの取り組みは、先行的な類似制度があり、子どもの貧困対策として、国土交通省と連携した、一層の取り組みが期待されます。

2020年3月吉日 為石摩利夫 (こどもの国副園長)

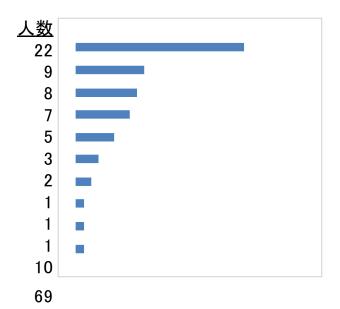
3. 応募作品の分析

3回の作文コンクールでは104作品が寄せられた。それらを客観的に、また統計的に分析した。

◆私の夢、ぼくの夢

104 作品の内、子どもたちの作品 69 人の将来の夢

<u>将来の夢</u>
医療•福祉分野
作家・デザイナー
スポーツ選手
学校の先生
食関連
芸能•音楽家•声優
運輸(運転士)関連
囲碁
観光•旅行会社
通訳
その他
作文数(子どもたちの人数)



天寿を全うすること、助産師、看護師	
薬剤師	
看護師	
保育士、かん護士	
医者になって恩返し	
病院に行けない沢山の人々を助けたい	
青年海外協力隊、看護師	H
看護師	ľ
笑顔を届ける医者	li
医師	li
看護の仕事に就く	li
地域医療に貢献する医師	li
障がい者と呼ぶことのない世界	
保育士、児童養護施設の先生、結婚・子育て	li
デイサービスの先生	
看護師	
(子)医師・医療通訳翻訳士(親)息子に自分	
なりに頑張ってきた事を思い出し誇りと励み	li
にしてほしい	l
保育士、トリマー	ľ
小児科の医師	l
看護師	H
歯科衛生士、結婚し母親のようなお母さんに	1
なること	H

医師や看護師を支えるものを開発すること、

母の夢を叶えること

	絵本作家
	デザイナー
	マンガ家
	カフェを開きたい
	グラフィックデザイナー
	デザイナー
	グラフィックデザイナー
	ヘアメイクアーティスト
	MARVEL映画のクリエイター
╝	サッカーせん手
	プロ野球選手
	プロフィギュアスケート選手(オリンピック選
╝	手)
	オリンピックの水泳せん手
	バスケットボールの選手(WNBA)
	トップアスリート(誠実にスポーツを愛するこ
1	٤)
	オリンピックの水泳せん手
4	プロサッカーせん手
4	学校の先生、ユーチューバー
4	せんせい
4	小学校の先生
	学校の先生
4	小学校の先生
	スクールカウンセラー
_	司書教諭

パティシエ
四人家族のご飯を最初から全部一人で作っ
て食べてもらうこと
おかしの家に住むこと
ケーキ屋さん
四人家族のご飯を最初から全部一人で作っ
て食べてもらうこと
声優
一流のチェロリスト
声優
電車の運転手
鉄道の運転士
大学進学、囲碁のインストラクターほか
観光や旅行関係の職業
通訳
これからやりたいこと・夢
通訳
きょうみのあることを好きなだけ勉強すること
ママをしあわせにすること
ハワイにいくこと
核兵器廃絶(世界平和)
すべての子どもが好きなだけ学べる社会作り
世界の現状を見つめ、自他共に幸福を見つけ
ていくこと
世界の現状を見つめ、自他共に幸福を見つけ
ていくこと
音楽を通して平和活動をすること
将来苦しんでいる人を助けたい
ニホンザリガニの第一人者

◆家族への感謝

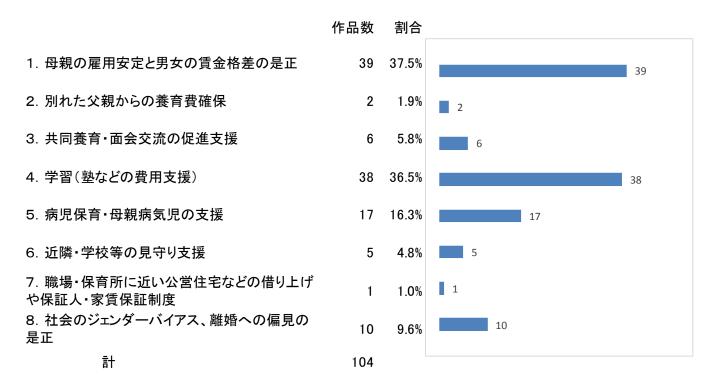
こんなにも多くの作品がお母さんへの感謝をあらわしている。

思いや感謝は、制度や先生などにも向けられている

国が無料で誰でも勉強できる場所を作ってくれたことに感謝
支えてくれたいろいろな制度への感謝
進学のための民間助成金に感謝
共励会の前会長に恩返し
共励会の前会長に恩返し
無料で利用できる図書館
中学の社会の先生の献身さへの尊敬と憧れ
楽しいじゅぎょうのできるたんにんの先生が大すき
中学入学時のカウンセラーに感謝
TOFY という研究授業を受け夢への道を作れたこと
頼ることができた学年主任の国語の先生に感謝
小学校四年生の時の担任の先生に感謝と憧れ
喘息を親身になって治療してくれた医師に感謝

◆作文から見えた政策課題

104作品の記述内容から、政策に結びつく、思いや主張、提案などをカウントした。



具体的か提案

共作的は1定条
教育費の支援
アメリカの公立学校のギフテッドプログラムを参考に
ボランティア活動などで留学費用の免除
大学教育の無償化、AIによる人件費の削減
高校の無償化
奨学金制度の貸与型から給付性へ。給付型奨学金制度の充実。給付奨学金の対象拡大
大学・高校・塾や予備校費の助成、給付型奨学金
低所得世帯への学費援助
大阪に公立美術大学を
公立でない高校進学のための補助金額を増やしてほしい
ボランティア活動で留学費用の免除
終身雇用でなく海外のような転職しやすいシステム
困っている障がい者への声かけ、物理的な障害をなくすこと
児童養護施設の建設
点字ブロックや点字、エレベーターをふやす
母子家庭だからと言われない社会
国、企業単位での支援活動

4. 受賞作品集

3回の作文コンクールに寄せられた104点の作文の内、優秀賞、準優秀賞の作品を掲載します。

2017年

部門	賞	タイトル	氏名	年齢など	住所
	優秀賞	みんなで力を合わせて	田中 潤	小6	大阪市北区
	準優秀賞	せんせいをめざしているわたし	森 優衣	小1	大阪府豊中市
小学生部門	佳作	わたしの夢、ぼくの夢	辺見 天佑莉	小5	大阪府豊中市
	佳作	二人三きゃくで歩む道	小野尾 恋夏	小6	東京都江戸川区
	佳作	ぼくの夢	清水 あれん	小3	東京都昭島市
	優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	結城 凛太郎	中3	横浜市旭区
	準優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	山口 芳純	中1	鹿児島市
中学生部門	佳作	わたしの夢、ぼくの夢	羽土 風有奈	中1	大阪府貝塚市
	佳作	信じて下さい	倉橋 明子	中1	鹿児島県西之表市
	佳作	私の思い	田中 美咲	中2	大阪市東成区
高校生部門	優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	田中 陽太(仮名)	高3	東京都渋谷区
	準優秀賞	ただ1人の人間	一森 明咲	高3	大阪府貝塚市
	佳作	夢と現実	廣瀬 菜海	高2	東京都北区
	佳作	わたしの夢、ぼくの夢	生島 優	高2	宮崎市
	佳作	わたしの夢、ぼくの夢	横井 由希恵	高2	大阪府泉大津市

2018年

部門	賞	タイトル		氏名	年齢など	住所
	優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	髙家	大暉	小4	東京都目黒区
子ども部門	準優秀賞	わたしの将来の夢	亀田	梨桜	小6	大阪府貝塚市
	佳作	私の夢	田中	美咲	中3	大阪市
親部門	準優秀賞	子どもへ託す夢	田山	花子(仮名)		九州
がいり	佳作	子どもへ託す夢	洲崎	裕美子		石川県
親子部門	準優秀賞	家族の思い出~父との思い出	田田	陽太(子:仮名)		東京都渋谷区
	準優秀賞	家族の思い出の物語~息子へ~	田中	まゆ(親:仮名)		東京都渋谷区

2019年

部門	賞	タイトル	氏名	年齢など	住所
小学生	準優秀賞	ぼくのしょうらいのゆめ	小佐野修拓	小2	山梨県甲府市
	優秀賞	やってみなくちゃわからない	森山ひかる	中3	千葉県浦安市
中学生	準優秀賞	私の言葉の出発点	新谷 美晴	14歳	京都府南山城村
	準優秀賞	僕の夢	永野 愛翔	14歳	長崎県大村市
高校生	準優秀賞	わたしの夢	高橋 佳苗	高2	千葉県船橋市
同仪工	準優秀賞	将来の夢、希望	羽土風有奈	高1	大阪府貝塚市
	優秀賞	働く母	金子瑠奈	19歳	札幌市
おとな	準優秀賞	子供から大人へ。	田口千尋	32歳	東京都杉並区
あとる	準優秀賞	私の成長という補助線から気づく互いの想い	櫻井 友哉	24歳	千葉県柏市
	準優秀賞	両親へ	糟谷愛	28歳	東京都北区

みんなで力を合わせて

私の夢は、絵本作家になることです。

きっかけは、学校の図書館で「ヨシタケシンスケ」さんの絵本を見つけた時でした。ヨシタケシンスケさんの絵本は、とても面白くて、おだやかな気持ちになれるものでした。それを見て私は、「こんな絵本、かいてみたいなあ。」と思ったのです。ほかに夢がなかった私は、絵本作家になろうと決心したのでした。

絵本作家になるために、今頑張っている事があります。それは、想像力を働かす事です。想像力を働かすためには、たくさんの、色々な経験をしなければなりません。なので私は、学校の友達と、どんな学校やどんな町がよかったなどを自由長にまとめていったり、絵本に出てくるシーンを出来るはんいでやってみたり、実際の絵本のお話をつなげて、オリジナルの紙しばいを作ってみたりしています。頑張っていることは、それだけではありません。子供受けするような絵を研究したり、書けないポーズなどは、鏡の前でポーズをとって写したり、いろいろな人の絵本を読んで学んだりしています。最近では、少しでも視野を広げられるように、英語の勉強をしたりして、色々頑張っています。絵本作家になるのは、簡単ではないけれど、私は少しの可能性を信じたいです。

今から、私の考え、意見をお話したいと思います。まず、私の夢とともに、社会が晩婚や少 子化に向きあっていけば、私の夢は叶うと思います。その理由は、晩婚が進むと、子どもが生 まれる可能性が減ったり、生まれたとしても、子供の生まれる数が少なくなったりして、少子 化につながると言う訳です。少子化が進むと、大人が少なくなり、やがて年金を納める人が少 なくなり、未来では、年金がもらえなくなるかもしれないのです。問題は、それだけではあり ません。子供が一人しか生まれないとなると、その子供が大人になった時には、もう両親はお 年よりになっているのです。なので、このままにしておくと、一人で二人を支えることとなり ます。さらに、今では結婚をしない人が増えてきていて、子どもが急激に減っているのです。 このようなことは、絵本作家にとってはとても重要なことなのです。なぜかと言うと、絵本を 見るのはほとんど子供です。なので子供が減ると言うことは、絵本を買って読む人が少なくな るということです。子供が少なくなるだけではありません。大人の数は子供の数より多くなり、 子供だけでは支えきれなくなります。その子供たちが大人になったとしても、大人の数が少な いため、また子供が生まれる数が少なくなって、どんどん進んでいきます。最近では地球温暖 化が進んでいますが北朝鮮のことでいっぱいで、なにもしてくれはしません。なので、自分た ちで地球温暖化をくいとめて、子供の住みやすい環境をつくるのです。このような問題一つ一 つをゆっくりでもいいから順番に解決していけばいいと思います。一人一人が自分の出来るこ とをやり、みんなで協力すれば、いつかは必ず、とてもきれいで、すてきで、幸せいっぱいの 明るい世界が手に入り、子供たちも幸せいっぱいで絵本を読めます。どんなにつらいことがあ っても、その世界を見れば、すぐに笑顔になる、そうゆう世界を、宇宙を私はつくりたいです。

どんな夢でも、一人で叶えることは難かしいです。夢をかなえるには、多くの人達の力がいります。たとえば、友人や家族、学校の先生など、多くの人達です。その人達全員が力をあわせ、助け合うのです。そうすることで、一人一人の夢が叶うのです。私は思います。この世に必要なのは、助けあうということ。

せんせいをめざしているわたし

「はいはい」とみんながてをピンとさせて大きくあげます。そのたびにせんせいは、「もりさんどうぞ」とてをむけてくれます。あてられると、じぶんのいいたいことがいえてみんなのまえではっぴょうできるからるんるんっというきもちになれます。また、うんどうかいのれんしゅうでは、みんなのまえで、たのしいダンスをおどっておてほんとなってくれます。しらなかったダンスをおどれるようになって、じぶんがおともだちにおしえてあげられるのでえっへんとむねをはれます。

わたしもたくさんべんきょうして、せんせいのようにこどもたちにえがおになってもらったり、じしんをもってもらったりしたいです。そのために、さんすうプリント十まいとかんじを四まいしています。また、ちいさいこどもにやさしくしたり、いろいろなことをおしえてあげたりもします。

わたしのゆめをかなえるためには、だいがくへいってべんきょうをしなければいけません。 たくさんのほんをよまなければなりません。まわりにたくさんのせんせいはいるけれど、どう やってなればいいのかおしえてくれません。だから、せんせいになるためのべんきょうをして いるおにいさんやおねえさんに、どうしたらせんせいになれるかおしえてもらいたいです。ねんれいがちかいほうがききやすいです。なりかたがわかったら、そのひととをなじようにべん きょうをしていきます。おかあさんがひとりでそだててくれているので、うちのちかくにある 大きなしろいおしろのようないえよりももっと大きないえをたててあげたいです。そして今までがんばってくれてありがとうとつたえたいです。せいじかのひとは、もっとべんきょうして こまっているひとにおかねやチャンスをあげて、みんながえがおでおなかいっぱいごはんがたべられるしゃかいにしてほしいです。

世界の「格差」が、僕の夢を生んだ。

今、アジアやアフリカを筆頭に、世界中には満足に医療を受けられていない人が、数えきれないほどいる。彼らは、近くに病院、そして医療品さえもない。それに対して、日本は多くの場合、すぐに病院に行ける。しかし日本でも、近くに病院がない人や、足が不自由な人、高齢者や体調の悪い人などは、必要な時に病院に行くことが負担となることが少なくない。同じ世界で、こんなにも差があるのだ。僕は、衝撃を受けた。

「病院に行けない沢山の人々を助けたい。」これが、僕の夢だ。満足に医療を受けられない人達を救うために、僕はAIと携帯端末、ドローンを使った「いつでも、どこでも、誰でも受けられる」医療を提供したいと思っている。病院に行かなくても受けられる医療が実現すれば、多くの人の助けになるはずだ。また、AIを使うことで、人件費を削減し、貧しい人々に無償で提供することが可能になる。

そんなアイディアを実現するためには、僕はこの先沢山学ばなければならない。ぜひ大学に行って、そしてお金の心配をせず、自由に学びたい。

しかし、今、日本では学びたい人にとって「教育格差」という大きな壁がある。学費が問題で、 行きたい大学に入れない優秀な人が多くいる。大学だけが唯一の学ぶ道というわけではないが、 大学でしか学べないことが沢山あるし、専門性や分野性でみても、大学で学ぶことはとても大 きい。研究などで大学院に進み、博士号の取得までする場合、平均で一千万円はかかるらしい。 奨学金は、他国のような給付型ではなく、貸付制度。調べてみると給付型でないのは、日本と 韓国の二ヶ国だけだという。この制度では、学生への負担が大きすぎる。

「学ぶこと」は大切だ。志があって学ぶ人たちが、学びたい大学で勉強するためには、今国会で議論されている「大学の無償化」が必要だと思う。同じ学力でも、持っているお金の額が違ったら大学に入れる人と入れない人がでてくる。このような「格差」をなくし、平等に学ぶ機会が与えられれば、今よりもっともっと優秀な人材が出てきて、日本はより発展していくはずだ。

世界中で、満足に医療が受けられる人と、受けられない人がいる「医療格差」。そして学びたくても、学べる人と学べない人がいる「教育格差」。「格差」は世界中に沢山あるが、もしなくなったら、テロをはじめとする紛争や、様々な社会問題の解決につながるはずだ。

教育の無償化は、きっと僕の夢の実現の追い風となってくれる。僕はまだ「医療格差」をなく すアイディアの実現に必要な、知識や技術を持っていない。

だからこそ、日々夢を追い続けて、学び、努力していきたいと思う。

「いってらっしゃい。今日もがんばれ。」

僕が塾へ行くときに母が、いつもかけてくれる言葉です。僕が塾に通い始めたきっかけは二つあります。

一つ目は、仲のよい友達が小学校低学年から塾に通っていて有名な私立中学校を目指しており、 合格しました。僕は、すごいなと思うと同時に、「僕は、県で一番の公立高校に行こう」と心に 決めました。

そして二つ目は、弟が八ヶ月の頃「川崎病」という心臓の病気にかかって、今まで数回入院しており、母も付き添いで行きます。今も心臓の血管に冠動脈瘤という、こぶが三カ所あり定期的に検査に行っています。母の話によると、入院中はずっと点滴をしていてトイレの時も点滴を持って行ったり、着替えは看護士さんのお手伝いが必要だそうです。足のつけ根から心臓まで、カテーテルという管を入れる検査の時は、朝から夕方まで全身ますいをしてするそうです。母は弟の目が覚めるまでとても心配だそうです。弟は薬を飲んでいます。赤ちゃんの頃は四種類も飲んでいました。その上、食べ物の制限もありました。今は薬も一種類になり、自分で飲んでいます。食べ物も何でも食べられるようになりました。僕もまだ幼かったけど弟が帰って来るまで心配だったし、母がいなくてさみしい思いをしました。それに点滴が外れないように包帯でぐるぐるまきになっている弟の写真を見て、とてもかわいそうでたまりませんでした。そこで、僕は決めました。僕の将来の夢は弟のような患者や病をかかえる人々に笑顔を届ける医者です。この夢を叶えるために、ひたすら勉強しています。

僕は、小学校の頃に塾の模試を受けてみました。結果は惨敗でした。そこで僕は初めて学校のテストと受験用の試験は、全く別物だという事を思い知らされました。今、塾に通わせてもらっています。塾の費用は、母にとって負担が大きすぎるため一度はあきらめました。しかし、祖父母にお願いして将来必ず費用を返すという条件で払ってもらい、塾に通える事になりました。週三日の授業ですが、授業のない日も自習をするためバスで通っています。帰りは十時十分に母が迎えに来てくれます。正直、帰宅後は眠いですが母も同じはずです。夏休み等は、朝からなのでお弁当を持たせて送り出してくれます。金銭面でサポートしてくれる祖父母、健康管理や送迎でサポートしてくれる母には、本当に感謝しています。

僕は、この事から一つの考えがあります。それは、学習の意欲がある人に対しては、条件を付ける等して塾の費用を助成してもらえる制度を作ってほしいと思います。そうすれば、夢が夢で終わる事なく実現に叶えられる人が、きっと増えるはずです。

僕は、先日行われた全九州模試で、理科が千百十四人中、四位でした。点数は九十七点。日頃の努力が少し表れたようでうれしかったです。これからは、他の教科でもこのような成績が取れるよう、ひたすら努力するのみです。

僕の好きな、鹿児島出身の水泳のオリンピックメダリスト宮下純一選手の言葉に「念ずれば通ず」という言葉があります。僕はこの言葉を胸に、今の僕に与えられた環境で、絶対に夢を叶えて、母を楽にしてあげたいです。

私は、医師を目指しています。今まで、役所、シェルター、母子生活支援施設、母子や DV 被害者の支援団体の方々など、多くの方の助けを得て、今の自分があります。支援して頂いたことに感謝し、自分の興味のある医療という分野を通じて、社会に恩返しをしたいと思っています。それが、私の夢であり、志です。

医師をめざした動機を話します。私が小学生の時、父の母への激しい DV から、母子 2 人で家を出、父親に居場所を知られないため住民票を移さず、転校を繰り返し、名前も変えました。親は離婚し、母は深刻なうつ病、PTSD に陥り就労できる状態ではなく、生活保護に至りました。中学生になり、住所を明かさず、父親と面会を時折しましたが、父は、昨年、脳出血により急逝しました。父親には、自分の母親にした非人道的なこと、そしてそれが原因での苦労もあり、大げさにいえば根みを持ってもいました。一方、私には、息子として愛情を持ってくれていることも知っていました。複雑な気持ちもありましたが、葬式で父親の冷たい額に触れた時、人が死ぬとはどういうことかを知り、そしてどんなことがあれそれはとてもとても悲しいことであると痛切に感じました。この時、小さい頃から興味があり、職業体験や1日医師体験などを病院で行っていたこともあり、医師という職業になることを決めました。そして、今、どのような医師になりたいか、自分に問いながら、文金銭的心配と戦いながら必死で受験勉強に励んでいます。

医療に関して、日本では現状、問題が山積みです。今高校3年生として、自分の将来を考えるとき、自分は、どのように、どんなことに、解決・改善に助力できるか、ということを考えています。私は、医療問題の前提・原点として、患者さん中心の医療の推進が、目下の課題であると考えています。この患者中心の医療の実現への解決策として、以下のことを勧めていきたいです。まず、大学・職場での医療の倫理教育の充実、二つ自は、オンブズマン制度によって第3者の目で常に check を行うこと、3つ目に情報公開の促進、4つ自は、医療スタッフを充実させ患者さんの声を医療に生かすことです。私は、こうした事を改善していける医師になりたいです。

変えられたらと願う社会制度について、書きます。

第一に、奨学金制度の貸与型から給付聖への変更です。

第二に、給付型の奨学金制度の充実を望みます。学費(施設費他含む)だけでなく、一定の生活費も支援があれば、学生も安心して学業に頑張れると思います

高校三年の現在、高校の学費に加え、大学受験料・入学金・前期授業料・保険料・施設費・他納入金、そして世帯分離し生活保護を抜け、児童扶養手当もなくなる大学入学後からは、学費・教材費・生活費(家賃・食費・光熱費雑費他)・定期代・交通費など全額を、アルバイトと奨学金だけで賄う予定です。理系の為学業と棺当額稼ぐ必要のあるアルバイトの両立に、大変不安に感じています。本当は、チームワークや体力を身につけ視野を広げ、人として大きく成長したく、大学時代に、部活動や勉強会・留学等もしたかったで、すが、それはできません。それでも学費以外に、一定の生活費の支援もあれば、本当に助かります。

このような形で、人の優しさを感じた人聞は、制度の温かさを知った人聞は、将来社会の一員となり、その恩を返す人間になれると、私は強く思っています。

第三に、給付奨学金の対象の拡大を願います。

国、民間、首都圏の大学には、社会的擁護や首都圏外の困窮家庭の子供への給付奨学金制度 は幾つかできました。そこに、生活保護家庭出身者を加えて頂きたいのです。首都圏であって も、生活保護家庭出身者の、「大学生活をスタートする事も、続ける事もできない」という窮状 は、認識されていません。他の子供と同様に、どうか、学ぶチャンスを下さい。

最後に、私は、DV被害、ひとり親、生活保護、病気の母(世帯主)持ち、離婚した父を亡くすという、当事者として、様々な体験をしました。色々な思いも、金銭的な苦労もあります。でも、不幸ではありません。色々な方々や制度の温かさに支えられ、高校三年生まで来られた事に、大変感謝しています。

そうした体験をしたからこそ、自分が医者として働くことが叶ったなら、特に患者さん中心 の医療のためにできること、パラメディカルの方々としっかりとコミュニケーションをとり連携すること、患者さんと対等の回線にたって病気だけでなくその病気が発生する根本の原因を見つけるためその方の置かれている環境・状況・事情・生活習慣ほかに目を向けられる医者になりたいと、強く思います。一人の力は微力ですが、そうして、世の中を変えていける人間になりたいです。そう思い作文に応募しました。

ただの一人の人間

小学生の頃、「障がい者理解学習のまとめ」というテーマで作文を書いた。作文を提出すると、 先生に文中の障害者という部分の害の字をひらがなに書き直すように言われた。子供心にくだ らないことにこだわるなあ、面倒だなあ、と思った。だが、こんな風に感じるのは自分がいわ ゆる健常者だからなのかもしれない、と考え直して言われた通りにすべて書き直した。それか ら、中学生になっても全ての害の字をひらがなで書いた。漢字に直せという先生はいなかった。 だからそれ以上このことについて考えなかった。

高校一年生の春、私は悪性リンパ腫で入院することになった。治療にはげんでいたある日、 抗がん剤の副作用で脳症と脊髄症を発症して身体の自由をほとんど失った。治療がひと段落し、 懸命な治療とリハビリで何とか使えるようになった右手を頼りに電動車椅子で学校に再び通い だした。高校にも障がい者理解学習のようなものがあった。やはり教科書にもプリントにも害 の字はひらがなで印刷されていた。障がい者の立場に立ってみても、その文字を見てああくだ らないと昔と同じ温度で感じる自分がいた。

調べてみると、害の字がひらがなになっているのは「害という字は公害や害悪といったマイナスイメージのある語に使われている。その字を人を表すのに使うのはどうなのか。」という意見かららしい。少なくとも私は漢字で害と書かれていただけで差別されたとは思わない。もちろん、ひらがなで書かれていたからといって社会に受け入れられた、とも感じない。それに、もう少し調べれば障害者の障害とは社会が特定の特徴を持つ人に対して向ける障壁、バリアのことだと出てくる。老眼になった人は眼鏡をかければ前までほとんど変わらない生活を送ることができる。世の中から段差が一段もなくなれば車椅子に乗っていても他の人と同じように外出できる。眼鏡があるから老眼の人は障がい者ではないが、世の中に段差がたくさんあるから車椅子に乗る人は障がい者。つまり社会が、人を障がい者にしているのだ。にもかかわらず、検索をかけるとたくさんの害の字をどうするか話し合った結論をまとめたページが出てくる。大の大人が何人も集まって大真面目にこのことを話し合ったのかと想像するとおかしくてたまらない。

人を気づかう気持ちは素敵だ。だが、その善意で表面的な字面を変えても自己満足にしかならない。そんなことよりも特定の特徴を持つ人を障害者にしている社会の仕組みや人の考え方を変えていかなくてはいけない。集まって話し合う時間やお金を、例えば点字ブロックを付けるために使う。車椅子に乗っている人が坂道を上がりきれずに困っていたら、後ろから押す。困っているなあ、と遠巻きに見ているくらいならまず一言声をかけてみてはどうだろう。

小さな一つ一つが積み重なって、段差などの物理的な障害も特定の特徴を持つ人を敬遠するような周りの人たちの精神的な障害も全てなくすことができたら。基本的には自分の力だけでできる。けれどももし何か困ったときはきっと誰かが助けてくれる。そう思えたら。今よりももっと気軽に、夜中に急にポテトチップスが食べたくなったとかいうしょうもない理由で出かけることができる。そんなふうに社会や人が変わっていければ、誰かを障がい者と呼ぶこともなくなるのではないだろうか。全ての人がただの一人の人間になった世界。そんな世界が私の夢である。

ぼくの夢は、子供のデイサービスの先生に成ることです。

理由は、一人で、ご飯を食べられない子にご飯を食べさせてあげたり、一人で動けない子を 助けたり、この様に体の不自由な子を助けたり、応えんしたいと、思います。

そんな体の不自由な子と、遊んでいると、楽しいなと、感じます。

デイサービスの先生に成りたい時には、体の不自由の人が出来ないことを勉強しないといけないと、思います。今、学校の国語の授業で「手と心で読む」と、いう勉強をしています。内容は、目の不自由の人についての話と、点字の仕組みなどが書いてあります。その教科書には、特別支えん学校の子供達の中には、点字で書かれた教科書で学習をしている人もいます。などと、書いてありました。

目の不自由な人は、最初、点字を手で読み取ることが大変そうだなと、思いました。

デイサービスの先生に成るには、体の不自由な子供達のどこが大変か、知ることがまず、必要じゃないかと、考えました。

これから、沢山勉強して、体の不自由な子達がどうやったら、喜こぶかを考えながら、勉強 していきたいと、思います。

これからの社会に対しては、もっと、点字ブロックや点字がふえたり、エレベーターがふえたり、もっと体の不自由な子達を助けてあげる様な物がふえたり、皆がもっと、やさしくなって体の不自由な子達を助けてあげれる様な社会になったら、良いと、思います。

わたしの将来の夢

わたしの将来の夢は、看護師になることです。なぜなら、一番上のお兄ちゃんが小さいころ から心臓が弱くて、二回も手術していて、大変だったということを、お母さんから聞きました。 赤ちゃんのときに、心臓にふたんがかからないように水分制限や、夜中に何度もおきてなかな か、ねむれなくて車で、ドライブしながら、ねかしつけた話も聞きました。最近では、そのお 兄ちゃんがもうちょうの部分が、いたくなって病院に入院して、手術をしました。そのときに お兄ちゃんは手術をしてつらくてこわい思いをしたと思います。わたしが看護師さんになれた らそんな病気のかんじゃさんの心がさみしくないように、声をかけたり、お世話をしてあげた いと思いました。それと、わたしのおばあちゃんは、認知症という病気です。時間の感かくが わからなくて、朝の三時におきてせんたくをしたり、うろうろしているそうです。お母さんが 近所にめいわくだから、朝の六時になってからせんたくをしてねと、言っているのに毎日朝早 くおきてせんたくをしています。お母さんは、そんなおばあちゃんや、お兄ちゃんやわたした ちの、お世話をしてくれます。わたしのお母さんは、いつも優しくてとてもがんばりやさんで、 前むきで、おもしろくて、わたしが落ちこんでいるときにはげましてくれたり、いつもどんな ときでもわたしのみかたになってくれるわたしの大好きなお母さんです。そんなお母さんにも 同じように、お母さんがなやんでいるときはわたしが相談にのってあげたり、お母さんを笑顔 にしたいと思いました。それと、家族みんなや家族でない人もわたしが笑顔にしたいと思いま した。わたしには、むずかしいからよく分からないけれど、生活や学校へ行ったり資格をとる ということは、たくさん勉強もしてお金もたくさんかかるみたいです。わたしは、高校生にな ったらすぐ、アルバイトをして、お金もためようと思います。お給料がでたら、家族の生活の ために、お金をあげて貯金もして、将来のために使いたいです。わたしの夢がかなうためには、 自分の努力と勉強しやすいかんきょうが必要だと思います。たとえば、看護学校がたくさんあ れば、たくさんの人が看護学校で勉強ができるし、看護師さんがたくさんふえてたくさんの人 を助けたりすることができると思います。幸せになる人がふえると思います。わたしは、病気 のかんじゃさんにありがとうと、言ってもらえるような看護師さんになりたいと思います。人 の役に立つことがどれだけ大変なのかは分からないけど、少しでも多くのいろいろな人の命だ けじゃなく、心も守れるような看護師さんになれるようにこれからの生活でも困っているよう な人を見かけたら声をかけようと思います。絶対になります。

子どもへ託す夢

高校三年生になった娘には夢があります。生まれ育った宮崎で医師になる事です。 小さな時から体が弱く、しょっちゅう喘息の発作が出ていたため、その治療をしてくれる優 しい病院の先生に憧れたのが、最初のきっかけかもしれません。

私は娘が一歳の誕生日が来る前に離婚をしました。

当時は様々な事があり、身も心も疲れきってうつ病の治療にも通っていましたが、親子二人暮らしのため、仕事を探さなければなりません。

とり急ぎ保育園に娘を預ける手続きを済ませ毎日、ハローワークで求職活動をするのですが、 特に専門的な資格があるわけでもなく、専業主婦だった私を雇って下さる所はなかなかあり ません。

面接に行っても「小さな子どもさんはよく病気をされますが、その時は誰が面倒を見てくれますか。」「残業や休日出勤がある場合はどうされますか。」と聞かれるのは当たり前。

時には「こんな小さなお子さんがいるのに離婚するなんて・・・。あなたは無責任な人なんですね。」と心ない言葉を言われた事もありました。

とにかく自分がやりたい仕事、出来る仕事を探すのではなく、小さな子どもを抱えていて も雇って下さる所を探す毎日でしたが、不採用通知が一件、また一件と届く度、人間失格の 烙印を押されているような気持ちになっていきます。

今考えれば大袈裟はようにも感じますが、当時、十件以上の不採用通知は「あなたは社会に 必要とされていません。」と言われている気がしたのです。

なんとか朝四時からパンを焼くアルバイトと回転ずしチェーンで魚を捌くアルバイトを見つけ、掛け持ちで働きながら正社員の仕事を探しました。

その甲斐あって、今は私と同じ立場のひとり親家庭等を支援する「宮崎県母子寡婦福祉連合会」に就職する事ができました。

会長をはじめとする皆さんが陰になり日向になり力になって下さり、おかげさまで勤続八年 目となりました。

私は娘に常に二つの事を言って聞かせます。

一つ目は「感謝ができる人になってね」という事。母子会の会長さん達やその他、私や娘を 気にかけてくれる家族・親戚・友達など、「やってもらって当たり前の事など何一つない。お かげさまで・・・。ありがとう。」という気持ちを絶対に忘れてはいけないよと話しています。 二つ目は「自分で食べていける力をつけなさい」という事。我が家は食べていくだけで精一 杯。残してあげられる財産は何一つありません。その事を理解している娘は「私が医者にな ってママを幸せにしてあげる。ママが頑張ってきた分、今度は私が頑張るから」と優しい事 を言ってくれます。

たいして手に職もない私が苦労して働いていた姿を見ていたのでしょうか。毎日、必死で勉強に取り組んでいる姿を見るとうれしい反面、せつなくもなります。

しかし、娘の頑張りだけではどうしようもない貧困の壁にぶち当たっている事も事実です。

近年、全国各地でひとり親家庭の学習支援は目覚ましい広がりをみせておりますが、医学部や難関大学を目指す子が利用できる所はほとんどといって、ありません。自助努力で何と

か出来る子は一握りだと思います。

大学に入学した後は給付型奨学金や学費の免除などの制度が少しずつ増えているので、次は 大学に進学するために努力している子ども達の学習支援があれば、さらに夢が広がるのでは ないでしょうか。

これから大学受験までの数か月。まだまだ合格には程遠いですが、親子二人三脚で頑張っていきたいと思っております。

田中陽太 (子ども仮名:予備校)

家族の思い出~父との思い出

物心ついた時にはもう父と離れ母と暮らしていた。母との思い出は多すぎて語りきれそうにない。父との思い出を振り返る事にした。

母への DV で、私は 6歳の秋に母と 2人母子生活支援施設に入り父とは別居し、小3の頃離婚が成立した。父の暴力で何度目かの怪我をした母と、自転車で逃げた後を父が追いかけてきた所に来たパトカーに乗り逃げて以来、私たちは安全の為、名前と身を隠して暮らし、小学生の間父と会う事はなかった。

父との次の再会は、中学2年の、多分夏だった。

DV のフラッシュバックで PTSD になり苦しんでいた母が、自分の病気と気持ちとを切り離して、私のアイデンティティ模索の為に、勝手に進めた再会で、正直最初の再会について余り記憶にない。

父との再会は、数回で途絶えた。住所を伝える事はなかった。

面会が途絶えて一年以上経った高2の秋、突然、父の訃報が入った。脳出血による急逝だった。父の訃報を耳にした時、父とは長い事離れて暮らしていて、実感がなかった。待合せを決める時も会う時も、私は父に「ですます体」の敬語で話していた。

しかし、通夜でも、告別式でも、遺影を抱き、独り父の棺と共に乗った霊柩車の中でも、私は泣き続けた。生まれて初めて葬式に参列したのが、父だった。父の仕事仲間が来て弔い、父の話を語ってくれた。彼らは、父のDVが原因で離婚した事は知らない。設計仕事の傍ら、仕事仲間と母子生活支援施設に果物を届けるボランティアもしていたそうだ。(父は私達が母子生活支援施設にいた事を知らない。)人間とは不思議なものだ。「いつも息子の話を、嬉しそうにしていた。」とも話してくれた。

私は、自分の知らない父の一面を知った。

父との最期のお別れの時、父の額に触った。棺に入った父の顔と、冷たい肌は、生涯忘れられそうにない。

父は火葬場で骨となり父の親族や仕事仲間、母と共に拾った。父の骨は、とても軽かった。 父であった面影はもうそこにはなかった。

父が生きていた最期の証しとしての形見分けとお別れをする為、私は、別居後の父の設計事 務所兼自宅のマンションを訪ねた。

ポストを見て、母が「あっ」と小さな声をあげた。父は母と離婚後、元々の自営の会社の他に、一つ会社を作っていたらしい。その会社名は、「ソレイユ」だった。母によると、フランス語で「たいよう」という意味らしい。私が安全の為別の通称に戸籍を変更する前の生来の名前であった。

中に入ると、仕事道具と、生活用品が溢れた部屋の、父の仕事机の横の壁に、昔母が父に送った、父と面会していなかった小学生の幼い私が座敷に座って笑っている写真と、私の誕生の

知らせを「たいようより」と書き父母が親類・友人知人に送った時の写真、2 枚が、拡大して 貼ってあった。

父の訃報を聞いた時は実感がなかったが、私はお葬式で泣き続けた。「ソレイユ」と言う会社 名の意味を知った時も、父の自宅兼仕事場の壁に自分の写真を見つけた時も、目頭が熱くなる のを感じた。子供の頃の記憶も殆どなく、物心ついてから会った回数も少ないのに、なぜ涙を 流したのかと思った。しかしやはり数少ない「ですます体」の面会の中で、自分に持ち得る事 の決してない父からの愛情を感じていたのだろう。死後、火葬場で父の仕事仲間から父が私の 話をよくしていたと聞いた時も、自分の写真が貼ってあるのを見た時も。

私は今、医師の仕事、そして医療通訳翻訳士を目指している。

それが私の夢であり志であるならば、生きていたら父も応援してくれただろう。父のDVから家を出、苦労もした。一緒に過ごした時間も限られていた。それでもやはり、私を思ってくれていた私にとっての唯一の人間らしい父である。

思い出を胸に成長してきて、今まで支えて下さった方に、恩を返す為にも、私は、自分の志を叶えたいと思う。残り半年、働きながら、この限られた浪人生活を大切に、目標に向かい、勉強に励む所存です。

家族の思い出の物語~息子~

半年前の高校3年の春、卒業記念に息子と2人で、桜を見に行く旅をした。舞散るピンク色の桜の花を君と眺めながら、私は君と暮らして来た幾度もの季節を思い出していた。

18年前の出産。陣痛の合間に、お腹にいる君に手を添えたパパとママの3人で、溢れんば かりの笑顔の写真を一枚撮った。写真は今はどこかに仕舞われている。

パパは陣痛で痛がるママの腰を撫で続け、君はママのお腹の産道を通り抜け、陣痛開始から 14 時間後に生まれた。パパは君を最初に抱き、軽く小さな君の重みと産声と確かな温もりに涙を流した。これが親子3人での1つ目の共同作業だった。

パパは君の名前を熱心に考えた。君の名前は「たいよう」と決まった。「大きな太陽のように周りを照らし温めながら、幸せに育って欲しい。」そう願って私たちは親としての第2の大きな共同作業、「名付け」を終えた。

第一子で全てが初めて。おたおたする度、新米夫婦は父と母に成長させて貰った。私が思い 出す特に幸せなひとときは、仕事後の保育園のお迎えで、走って駆け寄って来るはち切れんば かりの君の満面の笑顔と、お喋り。寝る前の絵本読みのひととき。パパの君との一番の思い出 は、お風呂と、休日の公園での肩車かな。本人にはもう聞けないので分らない。君は幼すぎて 覚えていない3人家族の時の思い出。

しかしその反面、パパのママへの暴力は更に頻回になり、小1の夏母子でシェルターに保護され、母子生活支援施設で別居、小3で離婚した。行政の助言で安全の為、母子共に名前を2度通称に変え、最終的に家庭裁判所で通称を戸籍名に変更し、君は生来の「たいよう」という名を手放す事となった。

2人暮らしの母子生活支援施設の時の思い出。お金がない中工夫し、当選したスーパーの懸賞の、田植えや稲刈り旅行、お芋掘りや親子料理教室などに一緒に参加した事。君は忘れてしまったかもしれない、お母さんにとっては親子2人の楽しい思い出だ。

君が生まれて16年目の高2の秋、パパは他界した。

君は幼い頃の父との思い出は記憶にないと言う。安全面から名前を変え、面会をしなかった 小学生時代を経て、最初は嫌がったが、君は父との面会を、たまにした中高時代。その後又会 わなくなり1年以上経った時、君は、父の急逝を知った。葬儀中、親族席に座る君が真っ赤な 目をして鼻を啜る音だけが、斎場に響いていた。私は息子父にそっと手を合わせながら、末席 で、君の誕生に涙を流した父の死を悲しむ君を静かに見守っていた。

そして今春、私は一人、君の高校卒業を見送った。

今、君は浪人して働きながら、自分の志に向かって懸命に邁進している。来年の春には新しい道を歩み始めるだろう。進学先によっては寮生活となり、母のいる家を巣立つかもしれない。 何気ない会話や親子喧嘩も、思い出に変わるだろう。

家族には、家族の分だけ各々に形や思い出があり、時と共に形を変える。

誕生、DV、病気、別居や転居転校、離婚、死別、入学や卒業、様々な事があった。お互い恐らく、苦しい事も楽しい事もあった。それらは、私達をまた新しい未来へと送り出してくれるだろう。息子が巣立つ日、私は空の巣症候群になるかもしれない。一人で1つの大切な命を18歳まで育て、見守るのは、幸せでも大変でもあった。言葉にならない。元気に18まで育ってくれた。君と過ごした母としての思い出は、1人の人間として、私には大きなギフトだ。沢山のプレゼントを有難う。

君の人生は、これからだろう。ふと立止まった時、愛されたり支えられたりしながらも、自分なりに頑張ってきた事を思い出し、誇りと励みにしてほしい。

私も子の旅立ちの喜びと寂しさを胸に、家族の掛替えのない思い出をくれた 18 の君に感謝して、君が巣立った後も更年期と諦めずに、まだ続く自分の人生を形作って行こう。何十年先振返れば、又そこに新しい自分なりの思い出が出来ているのを期待して。

ぼくのしょうらいのゆめ

ぼくは、プロサッカーせん手になりたいです。

パパがサッカーのコーチや、かんとくをやっていたからぼくも、がんばらなきゃと思いました。

パパは、むきむきだったからたんぱくしつをとっていたんだってわかりました。 2016年7月19日火曜日にパパが、びょうきで、なくなっちゃったからぼくもパパのようにサッカーをがんばらなきゃと思いました。

いっぱいいっしょうけんめいいいのようになりたいなとおもってがんばったらどんどんせいちょうしました。

そこでリトルウィングカップと言うたいかいがありました。 ぼくは、キャプテンをつとめました。 みんなのことを分かるキャプテンが一ばんいいキャプテンとおぼえました。 そのしあいは、2 いになりました。 こんどは、ぜったい、ぜったいにゆうしょうする気もちでした。 パパのようになりたかったです。

やってみなくちゃわからない

将来の夢は、音楽を通して平和活動をすること。こう言うと、みんなは「すごいね。」と褒め てくれる。

しかし、私はその言葉が空虚であることを知っている。褒めてもらいたいから言っているのではない。できれば実現させたい夢だ。がそのためには、少なくない経費が必要である。楽器を買うのも、習うのも、外国語を学ぶのも、海外へ行くことも、何もかも実現するための経費が必要だ。

私の家は母子家庭で、母も一生懸命私たちのために働いているが、生活する以外の出費は不可能なのだ。プラスアルファが出来る状態ではないのだ。生きていくことが可能な収入しかない。音楽を通して平和活動、自信をもって言える日はきっと来ない。

そのようなことを考えていたある日、偶然ユーチューブで鉄拳のパラパラ漫画を見た。見たいと思ってみたわけではなくて、きっと押すところを間違えてしまったのだと思う。

お父さんが自分をかばうために亡くなってしまい、そこから母子家庭になり、お母さんがいつも忙しくて、食事も一人、行事にも来てくれず、寂しさに耐えきれなくなりすさんだ心になってしまう・・という話だった。

自分を見ているようで涙が止まらなかった。さんざん泣いたあと、私もがんばってみようかな、という気持ちになった。大金持ちになることはないけれど、貧乏なら貧乏なりの夢のかなえ方があるのではないかと思った。そしてもう一つ、世の中の基準のようなものさしを打破したいとも考えた。

まずは経済格差が学力格差になること。今はその通りになってしまっているので、教科書や 学校でもらったプリント、自由に持っていける問題プリントなどで、この夏休みの間に学力を つけようと思う。経済格差は学力格差に比例しない当たり前を作りたい。

次に、音楽をあきらめない。方法は模索中だが、あきらめてしまったら本当に終わってしま う。莫大な費用がなくても音楽ができるところはないか、アンテナをはりめぐらせ、いろいろ な方法を試してみたい。やってみなくちゃわからないのだから。

最後に、平和活動をするためには、平和とは何か、世の中では何が起こっているかなど事前 リサーチが必要である。この問題を解決するのには、やはり図書館が一番。日々のニュースと これまで、これからを自分で調べ、考えていきたい。これは受験勉強にも役に立つ。地理や歴 史、文章を読むことで国語の勉強にもなる。英語で書かれた書物にチャレンジすれば、英語の 勉強にもなる。無料でできることははかりしれない。無料でできることにはビッグチャンスが 眠っている。そう思う。

国内外で様々な問題があり、毎日どうしてこんな事件がおこるのだろうと、悲嘆に心が暮れてしまう。だからと言って、ここで立ち止まるわけにはいかない。ただ悲しみに暮れているだけでは、解決にならない。

こういうとき、音楽の力が役に立つ。どんよりした気持ちを晴れやかにしたり、閉じ込めて おいた気持ちのふたを取り外して、希望の一歩の準備を整えたり。

大事な人が死んでしまったのに自分だけ生きていたら申し訳ない、そういう言葉をよく耳に する。いろいろな応援の言葉が閉じ切ってしまった心の扉で、心の奥に届かない。この閉じ切 った扉を、音楽の力でゆっくり溶かしていったら、希望の光もあたたかな言葉も入ってくるのかな、と思う。

いろいろ前向きな発言をしながらも、やはり心のどこかで、どっちみち夢はかなわない、という私がいる。

本当に母子家庭は夢がかなわないのか、やれるにしてもやれないにしても、先陣を切る人が必要。ならば私が、やれるところまで覚悟を決めてチャレンジしようと思う。

私の言葉の出発点

私が一番初めにスクールカウンセラーという職業を知ったのは、中学に入学してすぐだった。 一年生全員に実施されるカウンセリングでのことだった。日頃なかなか話せない悩みや不安も せきを切ったように溢れ出した。あの不思議な感覚とほっとした思いは今もはっきりと覚えて いる。その当時、私の父はがんで闘病中だった。私は父の将来に対する不安や悩み、愚痴など を全て話せた。家族にも友達にも相談しづらかったことだったのに、カウンセラーさんにはな ぜか話すことができてとても心が軽くなった。

父は次の年の冬に亡くなった。父の死はあまりにもショックで当時の私にはとても受け止め きれないものだった。悲しみと苦しさの中にいた私を救ってくれたのはたくさんの温かな言葉 だった。

その中で、今でも忘れられない特に心に刻まれた言葉が二つある。

一つ目は、カウンセラーさんにかけていただいた言葉だ。私が一番苦しかったのは最後まで 父にきちんと「ありがとう」と言えなかったことだった。そのことを打ちあけた時に、「お父さ んは普段わざわざあなたに『大事な子だよ』とか言わなかったでしょ?それでもお父さんにと ってあなたが大事だってことは伝わっている。だからお父さんにもあなたの気持ちは伝わって るよ。」

と言っていただいた。全身の力が抜け、ほっと楽になる感覚があった。父の生前、最後に会話 したのは三学期の始業式の日だった。

「行ってきます。」

その一言だけだった。父はその日から入院しその後一度も話すことはなく旅立った。お正月も、 その前もたっぷり時間はあったはずなのに、私は何も言えなかった。そんな自己嫌悪と後悔の 渦にいた私をこの言葉は救い出してくれた。

二つ目は友達にかけてもらった言葉だ。私が泣きたくないのに泣いてしまうことがあると相 談したとき、

「泣きたい時、涙が出てしまう時はそのままいっぱい泣いたらいい。そうしないと次に精一杯 笑えないから。」

と言ってくれたのだ。私は家族のほうが父と長く一緒にいたからもっと辛いだろうと思い、泣かないようにと思っていた。家族や親せきはそれぞれの悲しみと向き合い、父を偲ぶ気持ちで一杯で私は自分の気持ちを言えなかった。でも涙は自然とあふれる。それがすごく嫌だった。そんな私をまるごと受けとめてくれた言葉だった。私は誰かに辛かったね、大丈夫だよと受けとめてほしかったのだ。苦しかった私を温かく抱きしめてくれた、その友達には感謝してもしきれない。

これらの出来事は、大切なことを教えてくれた。言葉とは相手を受け止め、相手を理解し心を軽くしたり、痛みを分かちあってくれる。そして、明日への前向きな歩みを支えてくれる。 そんな言葉の力を身を持って私に体感させてくれた。振り返ってみると、ずっと担当してくださっている国語の先生、一、二、三年の担任の先生、そして小学校からずっと一緒に過ごしてきたクラスメイトの沢山の温かい言葉が思い浮かぶ。それらの言葉は、辛い時には私を支え、励ましてくれていたのだ。 今、私はスクールカウンセラーを生涯の仕事にしたいと考えている。昨今、中学生や小学生は揺れ動く時代の中でいじめや不登校など様々な問題を抱えている。私はそんな子供達の心の寄りどころになりたい。そしてその心を包みこみ、そっと背中を押すことのできる人でありたい。父もどこかから私を見守り、そっと「がんばれよ。」そう言ってくれていると信じている。

僕の夢

私には、将来の夢があります。それは鉄道の運転士になることです。

私は小さな頃から鉄道が大好きでした。私の家には車がなく、交通手段としてよく鉄道を利用しています。幼い頃は、鉄道に乗車するときは毎回、椅子には座らず先頭車両の運転席の後ろに立って運転士さんの背中を憧れの目で見ていました。こんな鉄道好きの私のため、母はいろいろな場所に連れて行ってくれて多くの経験をさせてもらいました。沢山、鉄道に乗せてもらったり「鉄クラ」というJR九州が運営するクラブに所属し、なかなか出来ない体験をしたりしました。このような事を通して鉄道の運転士への憧れが強くなっていきました。中学生になり勉強や部活動で忙しくなり、鉄道に乗る機会が少なくなりましたが、鉄道の運転士になるという夢は消えていません。そして現在中学三年生となり自分の進路を決める大切な時期になりました。私は、鉄道の運転士に近づくために工業高校に進学して専門的な知識を学びたいと思っています。ですが、私の母はシングルマザーで女手一人で私を育ててくれています。また、母は体の調子があまり良くなく思うように働けず私の家庭は生活保護を貰いながら生活しています。なので、本当に全日制の工業高校に行きたいと思って良いのかなど真剣に悩んでいました。そんなとき母が私に、

「あなたに本気で叶えたい夢があるなら私は、その夢の実現のために本気で応援する。」と言ってくれました。その時、私の心の中で諦めかけていた鉄道の運転士への夢が再び浮び上がってきました。

「僕は、鉄道の運転士になりたい。そのために工業高校に進学したい。」これまで心の中に溜め込んでいた本音を母に伝えることが出来ました。

現在私は、工業高校に進学して鉄道の運転士に近づくために勉強や生徒会活動などを頑張っています。勉強はとても苦手ですが小さな頃からの夢の実現のために「やる前から無理と言わない」をモットーに努力し、少しずつ成績も向上してきました。あの時、多くの経験をさせてくれたり、将来の夢を堂々と言える環境を造ってくれた母には本当に感謝しています。中学三年生になり進路について本気で考えるようになってから、夢のある幸せ、夢の実現のために応援してくれる人がいる喜びなど多くの事を学んで成長出来た気がします。高校は、いろいろな制度を利用して行こうと考えています。ですが、まずは第一志望の高校に合格できるように頑張ります。そして、私は絶対鉄道の運転士になってみせます。

わたしの夢

私の将来の夢は、司書教諭になる事です。司書教諭とは、学校の司書と教師を合わせた職業の ことで、とても狭き門とされています。何故、このような職業を志すようになったのかを、私 なりに綴ってみようと思います。

私が物心ついた時には父はすでにおらず、小学校の授業参観や運動会にはいつも母や祖母が 来てくれていました。父という存在がいないのは今となってはもう慣れた事ですが、当時の私 は不思議だな、皆には居るのになんで私には居ないんだろうと思っていました。

小学校高学年にもなると、段々父のいない理由が理解出来るようになり、六年生の時に授業で書いた、お父さん、お母さんへの手紙は父の居ない悲しさ、不安、母への怒りが混ざって、 上手く書けず、その日の帰り一人部屋で布団を被って日が変わるまで泣き続けていたのを高校生になった今でも覚えています。

そのまま近くの中学校に進学した私は、とことん勉強しなくなります。世間一般でいう反抗 期に近いですが私の場合は母に嫌われたと思いこみ、勝手に自分の殻を形成した、という方が 正しいかもしれません。内気で相談相手もいなかった私は学校でも家族の中にも居場所がつく れず、形容し難い悩みを抱えて過ごします。その頃唯一の救いとなっていたのが読書でした。 読んでいる時は正義のヒーローにも、天才探偵にも、外国へも行けるからです。性に合う本を 図書館で選んでは下校時刻ギリギリまで読み続けていました。学校でも家でもない図書館が私 は大好きでした。

受験年になると周りは高校を選んだり、見学に行ったりしていたのですが、私自身は決めかねていました。今までの行いが災いし、ほぼ行ける高校が限られている中で困った私を助けてくれたのが当時の学年主任でもあった国語の先生でした。半ばカウンセラーのような存在で、いつも話すのは担任の先生ではなく、その国語の先生でした。先生の助けもあって無事、第一志望校に合格したのです。

高校二年生となった今、将来を考えた時、まっ先に思ったのが国語の先生でした。一番身近で一番頼りにしているのが国語の先生で私もクラスとしての授業ではなくて一人一人によりそえる人になろうと思えたからです。

そして司書も同時になりたいと思いました。中学校、そして高校も図書室は使用していますが、やはり同年代の本離れや高校での朝読書を行わないなど、著しく読書という文化が廃れていっています。読書をする事は自らの視野を広げ、日本語の表現を増やす、高める行為でもあります。英語などの異国言語を覚えるよりもまずは、日本語のプロ、言葉をきわめた人がより多くなれば嬉しく思います。

最後に、私は夢の実現のために今できる事をしています。様々な分野の本を読んだり、国語 教師にまずはなれるよう受験勉強を今度こそ本格的にやったりしています。また、私のように お父さん、周りの大切な人が居ない子ども達に私が夢を叶えて何が出来るのかを常日頃考えて います。少しでも沢山の人が本当にやりたい事を誇りにできる社会をつくっていきます。環境 だけのせいで夢が憚られることは、絶対にあってはならないのだから。

将来の夢、希望

私には産まれた時から父親がいません。私は5番目に産まれた子供ですが、四番目に産まれていた兄になる人が産まれて半年で天国に行ったそうです。その時に両親の仲に何かがあったらしく、私が産まれてすぐ離婚したらしいです。でも私には姉も兄もいて、いつもうちの家は賑やかで、寂しいと感じた事はありませんでした。

離婚した時に両親のあいだで私が中学生になるまでは学校行事には父親も必ず参加するとゆ う約束を交わしたらしく、保育園の入学式、卒業式、運動会小学校の入学式、卒業式、運動会 には 必ず両親も姉、兄、おじいちゃん、おばあちゃんもみんな来てくれたし、他人の目を気に する事も、寂しい思いをする事もなく過ごしました。

母子家庭で辛かったのは、やはり金銭的な事でした。お母さんはいつだって、必死で働き友達のお母さん達みたいにみんなでランチに行ったり、旅行に行ったり、服を買ったりする余裕も全然無くて、私が物心ついてから母親が自分の物を買ったのを見た事が無かった。

それでも私達兄弟には

「よその家庭と同じまでは行かなくても、人に恥じない生活をさせてやりたい」が母親の口癖でした。だから私もクラブで靴がボロボロになって、友達がみんな新しいのを買っていも母親には絶対買って欲しいと言わなかった。言わなかったのではなく、言え無かった。でも友達に貧乏だと思われるのが悔しかったからその都度言い訳を上手く並べていたお小遣いも欲しいと言えず、友達がクラブ休みの日にみんなでユニバや難波に行く時も私は用事があると嘘をついて行かなかった。

だけど、中学3年思春期。色々な思いが葛藤して母親に反抗し始めた。母親が悪いんじゃないと頭ではわかってても上手く母親と向き合えない自分がいた。そして受験。仲良しの友達達とみんなで同じ私立を受験した。みんなは専願。当然私は滑り止め。必死で勉強した。行きたい高校があったし、私立は絶対無理やと思ってたから。公立高校合格。

新しい高校に行きだしてから、反抗期は更に強くなってしまって母親とあまり口を聞かなくなった。高校にも馴染めず、友達関係もうまく行かず私立専願で行った仲良しグループがいつも楽しそうにやってるのを見てはしんどかった。私もお金持ちなら迷わずみんなと私立に行ったのに…と。

ある日 母親に高校辞めたいと初めて泣いた時、母親は「高校のクラスの友達を何人か呼んで タコパしてお泊まりしたらいいよ」と言った。四人泊まって、朝リビングに降りると可愛い木 のプレートに四人分の朝ご飯を可愛く作って置いてくれていた。みんなは喜んで、又お泊まり 来ていい?と、言い、それがきっかけで友達と距離も縮まり高校に行くのも少しずつ楽しくな った。母親なりに一生懸命考えてしてくれた事やとわかったし、休み無しで働いてるのに私の 事もいつもちゃんと見てくれてる。

今、私は母親が勧めてくれた歯科衛生士を目指そうと思っていますそして安定した仕事について安定した給料をもらって母親に一つずつでも何か買ってやりたい。

母子家庭でも立派に育ったよって母親に報告したい。貧乏が嫌で嫌で反抗してたけど今は自分が少しだけ大人になったのか、一生懸命働いて、結婚して母親みたいなお母さんになって又仕事復帰出来る歯科衛生士に頑張ってなりたいです。

働く母

私は、母子家庭に育ち、現在大学二年生で、大学では主に法律を学んでいる。

私の母は、今年 57 歳の仕事一筋な人間である。連休など仕事がしばらくないときは、普通なら喜びそうだが、私の母は全く喜ばない。歳で体のあちこちが痛くても、熱が出ても、持病のぜんそくが出ても仕事へ行く。家庭内の金銭問題で苦しみながら、母子家庭で子供三人を育てなければならず、稼げるだけ稼がなければという状況でずっと生活してきたからだ。仕事のせいで、私は家で一人いて夜遅い時間まで母の帰りを待つという日がとても多かった。少し早く帰ってきても、母は疲れてすぐ爆睡なんて日が当たり前だった。家事なんてやる時間も体力もなかった。

たくさんの時間と体力を使って働いても給料は低く、ぎりぎりの生活だった。それでも母は、私のやりたいことはやらせてあげたいという一心で、教育についてのお金は惜しまず出してくれた。小学校から中学校まで毎月、学習教材をとってくれたり、中学・高校と続けた部活動では、学校の授業料だけでも高いのに道具代・遠征代を文句言わず出してくれた。部活動は、私が頑張れば頑張るほど全道大会などの遠征費用が発生し、生活が苦しくなるにもかかわらず、「お金は気にしないで頑張ってこい」といつも言ってくれた。大学の費用だってそうだった。一見普通のことに思える。しかしうちは母子家庭だ。母が必死に働いてくれたおかげで、部活動や大学進学など私にはできないだろうと思っていたことができた。常に子を優先してくれて、母子家庭なのに、そう思わせないほどのことを母はやってくれた。今でも、体のあちこち痛めながらも仕事に行く姿を見て、ほんとに申し訳なく思う。母には本当に感謝している。

私の夢は、母が金銭問題に苦しんだ経験から、法を専門に扱い、母のように金銭問題に苦しむ人を助ける職に就くことである。さらにもう一つある。それは、母と旅行に行くことである。私は、これまで母と旅行に行ったことが一度もない。時間もお金も無かったからだ。私は現在バイトをして、お金を地道にためている途中だ。今でもたくさん働いている母に、ゆっくりできる時間を過ごしてもらいたい。いつ行けるかわからないが、必ず行きたい。

母が必死に働いてくれたことには、ほんとうに感謝している。しかし、それ故に思うことがある。あまりに働きすぎた。家でもいいから、もっと母と一緒にゆっくりする時間が欲しかった。ひとり親家庭の子とって親は一人しかいない。子がごく普通の教育を受けるためにひとり親が長時間働かなければいけないという状況の家庭はたくさんあると思うが、これは子供の自己形成に重要な「親と子が一緒に過ごす時間」が奪われているに等しい。またその状況にある親を見て、子は「自分が負担」になっているのではなどと考えてしまう。すると子はどうやったら負担を減らせるかと考え、子がやりたいことをできないという状況を生みやすくしてしまう。さらに私もそうだったが、小さい頃から、家事を自分でやらなければいけないため、勉強したくても勉強する時間がないことも多かった。親にも子にも時間的余裕がなくやりたいことができないというひとり親家庭も多いはず。このようにひとり親家庭の問題は金銭的な部分ばかりではない。「時間的問題」もある。ひとり親家庭だからといって親も子も時間的に余裕を持てず、やりたいことができないというのではなく、「一緒」にご飯を食べて、「一緒」にお出かけして、「一緒」に寝てといった本来の親子のあり方でいれる支援制度が充実してほしい。

子供から大人へ。

幼い頃から、父を憎んで生きてきた。

私を、そして母を捨てた父を。

父とは20年近く会っていない。気付けば家の中から消えていて、消えた事に慣れた頃、正式 に離婚した。それ以来、父とは一切会わずに暮らしてきた。

母は、離婚したのは父のせいだとずっと言い続けてきたので、私もそうなんだとずっと思って いた。父が勝手に私達を捨てて出ていったのだろうと。私達は被害者。そんなことさえ感じて いた。

それでも小さい頃の父と遊んだ思い出が蘇り、ふと今どうしてるかな。会いたいな。と思うことはあった。私が大人になっていくにつれ、当然だが父も年を取る。いつまで生きていられるかわからない。生きてるうちに一度くらいは会いたい。しかし 20 年も会っていない。今更、とゆう気持ちもある。お父さんは私達を捨てた。家族のことなんてどうでもいいんだ。もしかすると私の事を覚えてもいないかもしれない…。会うことを想像しては、存在を否定されてしまうことが怖くて会いに行けなかった。とっくに新しい家族もいるかもしれない。だとしたら益々会えない。どうしよう…。

そんな風に思い悩み、時間だけが過ぎていく日々が続いたある日。SNS で一通のメッセージを受信した。差出人は、まだ両親が離婚する前に仲の良かった私の従兄弟だった。彼とも 20 年近く会っていない。まさかのメッセージだ。彼の話によると、父は今でも自分の実家で暮らしているとのこと。たったひとりで。そして、うつ病を患ってるとのことだった。せめて新しい家庭を築いていたり、一緒に暮らしてる人がいるなら、私も救われたのに。父を悪者にして生きていけたのに。ひとりで、それもうつ病で苦しんでるなんて。

ずっと父を憎んでいた想いがこのとき、ふっとどこかに行った気がした。

勿論、離婚は子供にとって大きな傷を付けることになる。実際私は傷付き、それは大人になった今でも消すことのできない古傷として残っているのは事実だ。たまに、どうしてもその傷が 荒れて痛むときもある。

しかしあれから私は大人になり、色んな恋愛をしたり、恋愛でなくとも沢山の人との出会いの中で、人それぞれの価値観の違いや、他人と一緒に暮らす難しさなども経験した。今だからわかることが沢山ある。もしかしたら離婚は父だけが悪かったのではなく、父と母、両方の問題で、きっとそれは仕方の無いことで。少なくとも、どちらが悪い、どちらが被害者ということではなかったのではないかと。母もまた、父を悪者にしなければ、たったひとりで父親役まで担うことができなかったのだろう。父も母も、一度は愛した人と別れたのだ。傷が付いていない筈がない。

現在私は、母が私を産んだ年齢になった。いいタイミングなのだと思う。この夏が終わった 頃、父に会いに行こうと思う。

会うことで、子供の頃にできた古傷が、温かいものに変わるかはわからない。もしかしたら ぶ厚いかさぶたを剥がしてしまうことになるかもしれない。それでも、その傷もまた、今より もっと大人になったとき、いつかは癒えるのだろう。

今だからわかる、大人の事情。大人の気持ち。

20年振りに会う父は、どんな顔をするだろうか。あんなに怖がっていたはずなのに、今では会うのが楽しみで仕方ない。

私の成長という補助線から気づく互いの想い

私が 11 歳の頃から両親の別居が始まり、16 歳の時に離婚しました。当時、話を聞いて正直 妥当だなと感じました。父親は、安定していて真面目が売りの普通すぎる私立の大学職員。母親は、変人を極めた世界屈指のフラワーデザイナーで個人事業主。この肩書きを見ただけで、なぜ結婚したのと感じる方も多いかと思います。当然、想像とおり価値観が合わず昔からよく揉めていました。このバトルの中でも、二人が特に揉めていたテーマが僕への教育方針です。父親は勉強なんていつでも出来るからのびのびと育て、スポーツを通じて勉強だけでは養えない協調性や組織での生き方という学びを得て欲しいという価値観でした。母親は、反対に小さい頃から塾に通わせて良い大学に合格させる為にも、スポーツよりも勉強が第一という価値観でした。どちらの価値観も正解だと思います。そのため、互いの正解をぶつけ合い揉めておりました。当時、何故私のことでこんなにも揉めるエネルギーがあるのか不思議でした。

互いの異なる角度の教育により、保育園の時から別居するまで、テニスとサッカーをしつつ、 公文から日能研まで塾にも通うという日々を送っていました。父のお陰あって、中学時代はテ ニス部、高校時代はサッカー部、大学に入ってフットサルということでスポーツを通じて多くの 友人と掛け替えのない体験ができ、今でも学生時代の部活の友人とは深い交友関係にあります。 そして、母の教育のお陰あって、行きたい大学の経営学部にも合格し卒業後は一部上場企業で経 営コンサルタントに就職することが出来ました。

このように簡単に書いていますが、今思うと私が幸せに生きられていることは、間違いなく両親の全く異なる教育方針のお陰です。片方の教育だけでは今の私の幸福度は、半減していると思います。 もっとも、両親が揉めて離婚までしなくても、私と同じように部活も楽しんで、勉強して、行きたい会社に就職して幸せな友人も沢山います。 でも私の両親は不器用故に、そして私の成長への深い愛が故に、揉めて互いに嫌な気持ちになりながらも私の幸せに繋がる道を創ってくれたのだな、と大人になって感じます。

私は両親からいただいた言葉でいくつか印象に残っている言葉があります。母が部活で日々 楽しんでいる僕の姿を見て、「父親は、運動だけは出来たからね。昔からスポーツクラブに入っていて良かったね。素晴らしい部活の仲間にも恵まれて良かった。」

父に、大学卒業と就職の報告に行った時、「俺は勉強については言わなかったけど、母親がうるさく、小さい頃から塾に通わせていたお陰だね。」分かり合えなかった二人が、全く違う角度の教育をした私の成長の結果という補助線を通じ、互いの教育に感謝し合っている姿を見て、カカオ80%超えのチョコを食べたような感覚に陥りました。私は、両親の喧嘩、離婚、そして両親が互いへ感謝するまでの過程を見て大切なことに気づきました。世界には沢山の正解があり、個人個人に譲れない主張があります。だからこそ一人一人の多様な価値観を否定せずに認め合う方が幸せに近づける。 "or"の選択肢ではなく、難しいかもしれないが"and"の選択肢を模索することを念頭に社会で生きようと思います。この価値観は、両親が尋常じゃないストレスの果てに授けてくれた私の人生を彩る為のプレゼントだと思います。

この感謝を伝えるため、両親へはこれからも自分の成長の軌跡を伝え、互いの想いに気づく機会を届け続けます。いつの日か、3人で食卓を囲む未来を目指して。

両親へ

大人になり日々を過ごす中、母に謝罪と感謝を、父に今の思いを伝えたいと思います。

私には父がいません。私が五歳の頃、両親の離婚により母と姉の三人暮らしになりました。 当時の私は父のいない三人暮らしが普通のことで中学生までは自分がひとり親家庭であること をさほど気にせず過ごしていました。

しかし、高校生になり、自分と友人との家庭環境の違いを実感し始めました。大学生になった時には寮生活を送る中で生活基準や育ちの違いがはっきりして、自分がひとり親家庭であることを恥ずかしく思うようになりました。友人と家庭環境が違うことに劣等感を抱くようになりました。両親の支援ある恵まれた家庭環境でお金の心配をせず大学生活を送る友人と、親からの仕送りはなく学費は奨学金で最低限の生活費はバイトで稼ぐ自分を比べては、嫉妬や劣等感で落ち込み、泣くことが多かったです。私自身、大学まで学ぶことがとても恵まていたはずです。それなのに母に対しては、もし父が居たら…とないものねだりしたり、嫉妬心から生まれる行き場のない怒りをぶつけたり、劣等感から恨んでしまったり、こんな思いするのも全部離婚のせいだと八つ当たりをしていました。大変な苦労をかけました。母には本当に申し訳なく思います。

また、社会人になり結婚してから、ひとり親家庭であることに批判的でよく思わない人もいるということ、世間のひとり親家庭に対する厳しさを知りました。今の時代、ひとり親家庭は決して珍しいことではないと思います。しかし、世間的に厳しい立場や環境であることは変わりません。他と違うだけで苦労すること、辛いこと、理不尽なことが多くあります。たくさんの悩み、苦しみ、大変さがあります。母も世間から非難や批判があり、私の想像以上に大変な思いをしていると思います。それでも母は一人で私と姉を守り育ててくれました。簡単なことではありません。ものすごい覚悟と行動があったと思います。

母はよく「何も恥ずかしいことはしてないから、下を向かず、胸張って、前を向いて!」と言います。この言葉に、私は支えられて今も頑張れています。なので、今まで多くの苦労をかけたことを謝り、ずっと頑張ってくれている母に感謝の気持ちを伝えたいです。

また、周りと自分の家庭環境の違いを考えた時、私は父に対して思うことがあります。

私は父との思い出が少なく、父のいない暮らしを何とも思っていませんでした。父は離婚後、 慰謝料や養育費を払わず逃げたそうです。聞いた話なので真相は分かりません。しかし、私は 自分の育った環境など様々なことを考えました。もし父が養育費を払っていれば、経済的負担 は少し軽くなり母の負担も軽くなっていたのではないか…そう思うと、行き場のない怒りとや るせなさを感じました。私の母は私がひとり親家庭であることが原因で友人から仲間外れにさ れたり、悲しい思いをしないように必死に育ててくれました。母一人で必死に育ててくれたお かげで、周りとあまり変わらない小中学生を過ごせました。しかし、母一人では限界があります。高校・大学の学費は奨学金を利用したり、だんだん生活は苦しくなりました。私は周りとの環境の違いに苦しむことが多くなりました。さらに結婚すると、育ちの違いが目立つようになりました。

私はこれまで父に何とも思わず生きてきました。それは無関心というより向き合いたくない 思いがあったからです。大人になり、ちゃんと父と向き合った時、色々なことを考えると怒り や悲しみが大きいです。親の離婚は仕方が無いことだと思います。それが悪いとも思いません。 けれども、離婚して終わりではなく、父としての責任を果たして欲しかったです。母だけが苦 労するのは嫌です。私が今生きているのは、母と父の存在があるからこそ、この世に性を受け 生きているのでその事は感謝します。しかし、父には何らかの形で親として頑張って欲しかっ たです。今は父の存在と向き合ったばかりで、正直会いたいとは思いません。しかし、いつか 気持ちの整理がついたら、会って直接私の気持ちを伝えたいです。思いを伝えて、事実を知り、 ちゃんと父と向き合いたいです。

2017年 表彰式



2018年 表彰式



2019年 表彰式



5. 作文コンクール開催概要

■作文コンクール概要

2017年

テーマ: わたしの夢、ぼくの夢

対象:ひとり親家庭の子どもたち

募集部門:小学生部門、中学生部門 高校生部門の3部門

賞金 : 3 部門それぞれ優秀賞 10 万円、準優秀賞 5 万円、佳作 1 万円 3 名

表彰式 : 2017年11月4日(土) こどもの国(横浜市)

2018年

テーマ: わたしの夢、ぼくの夢、家族の思い出

対象 :ひとり親家庭の家族

募集部門:子ども部門、親部門、親子部門の3部門

賞金 : 3 部門それぞれ優秀賞 10 万円、準優秀賞 5 万円、佳作1 万円 3 名

表彰式 : 2018 年 11 月 24 日 (土) こどもの国 (横浜市青葉区)

シンポジウム:「離婚と子ども一面会交流と共同監護」円より子(元参議院議員)、

為石摩利夫 (こどもの国副園長)、しばはし聡子 (一般社団法人りむすび代

表)

2019年

テーマ: わたしの夢、ぼくの夢

対象:ひとり親家庭の子どもたち、ひとり親家庭で育ったおとな

募集部門:小学生部門、中学生部門 高校生部門、おとな部門の4部門

賞金:4部門それぞれ優秀賞10万円、準優秀賞3万円2名

表彰式 : 2019 年 11 月 23 日(日) 主婦会館プラザエフ (東京都千代田区)

基調講演:「多様な家族と親子」円より子(元参議院議員)

シンポジウム:「 親と子の交流」 円より子 (元参議院議員)、為石摩利夫 (こどもの国園

長)、しばはし聡子(一般社団法人りむすび代表)、松井久子(映画監督)

■主催

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

■後援

厚生労働省、社会福祉法人こどもの国協会、母と子支援議員連盟、 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国母子生活支援施設協議会

■協賛いただいた団体・企業

株式会社東武鉄道、ロイヤルホールディングス株式会社、久光製薬株式会社、 日本医師会

6. ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

委員長 赤松 良子 元文部大臣、日本ユニセフ協会会長

丹羽 雄哉 元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長

坂口 力 元衆議院議員 元厚生労働大臣、母と子支援議員連盟副会長

徳川 家広 徳川記念財団理事 作家

横倉 義武 日本医師会会長 世界医師会会長

一色 浩三 株式会社メディカルシステムネットワーク 取締役

佐々木 典夫 社会福祉法人こどもの国理事長(2017、2018)

渡邉 芳樹 社会福祉法人こどもの国理事長(2019)

和田 勝 国際医療福祉大学客員教授、NPO あごら理事長

円 より子 元参議院議員、評論家

■審査員

委員長 丹羽 雄哉 元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長

小河 光治 公益財団法人あすのば 代表理事

松井 久子 映画監督、映画プロデューサー

円 より子 元参議院議員、評論家

渡辺 由美子 特定非営利活動法人キッズドア理事長

和田 勝 国際医療福祉大学客員教授、NPO あごら理事長

(2017)

阿部 彩 首都大学東京教授、「子どもの貧困-日本の不公平を考える」著者

萱野 稔人 津田塾大学総合政策学部長・教授

竹川 幸子 ハンド・イン・ハンドの会 元顧問弁護士

■事務局

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会事務局

〒102-0084

東京都千代田区二番町 1-2 番町ハイム 814

NPO法人あごら内

Tel 03-6256-9023 FAX 03-3261-1836

Email info@hitorioyakatei-shien.com